

都立 第五福竜丸展示館ニュース

2012.09.01
No.371

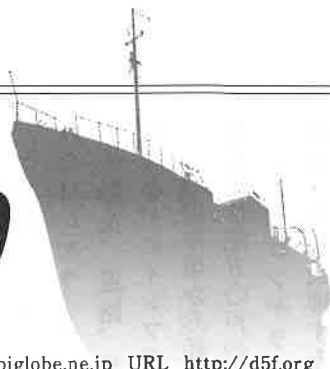
(9・10月号)

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会

連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail: fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

福竜丸だより



メジャト島の海で遊ぶロンゲラップの子どもたち
遊びながらタコをさがしていた。一九九七年 写真・島田興生



子どもたちの 未来のために

今年も夏休み期間中、たくさん子どもたちが展示館を訪れ、連日にぎわいました。

恒例となった生協の親子平和企画「牛乳パックでつくろう！第五福竜丸」工作教室には兄弟姉妹での参加もあり、たくさんさんの「オリジナル福竜丸」が進水式のビニールプールに浮かびました。(関連6面)。

夏休みの課題で福竜丸のレポートを書く中高生も多く、夏休み前から訪れる生徒も出現し、指導の先生を驚かせました。「展示館の人に挨拶して話しかける」のも課題とのこと、カウンターで待機するスタッフにとっても楽しい毎日でした。

また吹奏楽曲「ラッキー・ドラゴン」第五福竜丸の記憶(福島弘和作曲)を演奏する生徒たちが部活のメンバーで来館し、曲想を深め演奏

への決意をそれぞれに書き残していってくれました。

第五福竜丸展示館では、上半期の企画展「建造65年」に因み、「放射能のない未来に生きる子ども」サン・チャイルド」の特別展示をしました。子どもたちの未来を考える展示を企画しています。

第五福竜丸と同様、水爆実験の「死の灰」をあびたロンゲラップの人びとは、実験終了後の「安全宣言」をうけて故郷に帰りました。しかし健康被害が相次ぎ、島のおとなたちは話し合い「子どもたちの未来のために」と、故郷を脱出しました。あれから二十七年。ロンゲラップの人たちの、再帰島への長い道のりを中心に、核実験場となったマーシャルの歴史と現在を考える企画です(関連2・3面)。

マーシャルの「リー・ボム」は 決してくじけない。

島田興生

マーシャルでは被曝者のことを現地言葉でリー・ボムと言う。直訳すれば「リー」は「人」「ボム」は「原子爆弾」なので「原子爆弾の人」という意味になる。日本語の「被曝者」よりずっと直截的な表現だと思ふ。

今年三月と六、七月に、首都マジュロ、島民三二〇人が疎開しているメジャト島、そしてロンゲラップ島民の故郷ロンゲラップ環礁を訪ね、多くの「リー・ボム」たちにお会いした。

再帰島への長い道のり

一九九〇年末から開始されたロンゲラップ本島の表土の除染、道路、埠頭、発電所などのインフラの完成、二〇〇四年頃から始まった帰島民用住宅五〇戸の完成が近づくなどロンゲラップ島の復興計画が進捗するにつれ、



建築が進む帰島民用の50戸の新住宅（ロンゲラップ本島）

二〇〇九年一〇月には、アメリカ議会が二年以内（二一年一〇月まで）の避難先のメジャト島民の帰島を勧告。もし実行されなければ今後の補償を打ち切ると通告。このため、島民は帰島派と帰島反対派に分かれ、深刻な対立が続いている。しかし、帰島を決めている人でも「帰島したい

が、放射能はどれだけあるか分からない」（ボルカイン・アンジャイン副村長）、また、絶対帰らないと言っていた人も「私は被曝しているので帰ってもいいと思っている」（リミヨ・エボンさん）など立場

を越え、気持はゆらいでいる。それは、被曝体験、残留放射能レベルや除染範囲の評価、汚染食物や食料補給体制への不安、アメリカ政府や科学者への不信などで、どこに各島民が重点をおくかで帰島への賛否が決ってくるからだろうが、良く考えると、これらの問題は賛成・反対派を問わず島民誰もが日頃いだいている共通の不安や課題でもある。

今回の企画展では、被曝から五八年、ロンゲラップ島からの脱出後でも二七年たった島民たちの核との闘いの歴史の「いま」を事実に応じてお伝えすること。また、核実験に翻弄されながらも、一九八五年には自らの意思で島を脱出し、アメリカ政府に一九五七年の「安全宣言」を見直させるきっかけを作った、島民たちの果敢な行動と

病との闘いの自作曲を歌うリジョン・エクニランさん（今年三月五日マジュロ島）



道理を尽くした粘り強い対米交渉を評価しなければならなと思う。それは、全島避難を指導した国会議員チエトン・アンジャインさんの強力なリーダーシップと島の未来への熱い思いによるところも多かったが、チエトンさんの死去後も、その精神はいまだ島民の中に引き継がれていると思う。

帰りたい 帰れない

今後、マーシャル政府やロンゲラップ選出国会議員ケニ

ス・ケデイさんが求めている環礁南部諸島の除染が実行されるかどうか、未着工の小学校の建設が開始されるかどうか、帰島に向けてのハードルは高い。

八月一二日に放送されたNNドキュメント、12「除染の島へ・故郷を追われた27年（広島テレビ制作）」に登場していただいた二人の「リー・ボム（被曝者）」、キャサリン・ビレッジさん（77歳）二次被曝*次頁に注）が七月末に、リジョン・エクニランさん（66歳）が八月一八日にあいついで亡くなられた。

キャサリンさんは「島には放射能があるから、帰りたくない」、リジョンさんは糖尿病に苦しみながら、「島に帰って死にたい。放射能があるのは分かっているが、私はロンゲラップを愛しているのだ」と語っていた。

帰島を拒んでいたキャサリンさんも故郷への想いは人一倍強かったに違いない。帰島の時期が延びるにつれ、多くのリー・ボムや島民が故郷を偲び次々に亡くなっていく。（3めん下につづく）

<解説>

2012-2013 企画展

「マーシャルは、いま
～故郷への道」

「キヤッスル作戦」で生じた死の灰は広範囲に及び、ビキニ環礁、エニウエトク環礁の人びとが避難（移住）した先さえ、汚染されました。さらには隣の、ミクロネシア連邦ポナペ島やコスラエ島にも死の灰がふりそそいだことがわかっています。

故郷を出る

核実験終了後の一九五七年、米政府による「安全宣言」の後に、避難先の環礁から故郷ロンゲラップに帰島した人びとはやがて、健康不安、異常出産などが相次ぐなかで、島「脱出」を模索し始めます。そして一九八五年、三二五人が島を脱出。以後再びの帰島をめざして、現在に至る長い道のりが始まりました。

広範囲にひろがる死の灰
米政府は被曝被害について、核実験場となった両環礁以外に、第五福竜丸と同様「死の灰」をあげたロンゲラップ環礁、ウトリック環礁しか認めていませんが、ほかにも多数の島々が被害をうけています。ブラボー実験をふくむ

ロンゲラップの人びとは、粘り強い交渉の末、残留放射能の再調査と再帰島計画をアメリカに認めさせ、一九九八年五月からは、表土の除染と再定住のための工事が始められました。
避難先の島で人々は、核に負けまいとヤシを植え、子どもを育て生きてきました。

マーシャルは、いま
～故郷への道

2012年10月2日 - 2013年3月24日(月曜休館)

会場 都立第五福竜丸展示館

入館無料

◎スライドトーク

11月3日(土・祝)午後2時より

島田興生さんのスライド&トーク

(対談ゲスト)

名取弘文(ナトセンのおもしろ学校主宰) ほか

参加無料・申込不要

揺れるこころ

放射能被害は、目でみてわかるものは少なく、ましてや人びとの不安を展示することは困難です。島田さんが出

本企画展は、四〇年にわたるマーシャルを取材しつづけてきた、フォト・ジャーナリストの島田興生さんの監修で、このようなマーシャルの苦悩と努力の歴史と現在を展示します。

会ったロンゲラップの人びとの半生を紹介することで、島の人びとの「移動」経路と背景、病状、再帰島をめぐる葛藤などを伝えます。
また会期中に、新情報を追加していく予定です。
企画展に関連して、九月二三日に平和を語るつどいで、第五福竜丸展示館ボランティアの有志が、マーシャルの人びとの声を朗読します。

〔編注〕

* 二次被曝：ブラボー実験時ロンゲラップに住んでいた八六人(うち四人が妊娠中)がおり、実験から五時間後に救出され、クワジエリン環礁の米軍基地に収容された。
三年後の一九五七年、アメリカの「安全宣言」をうけて帰島した二五〇人のなかには、ブラボー実験時に、ほかの島に出かけるなどしていなかった一六五人も含まれていた。これらの人は、直接死の灰をあげてはいないが、島に残った放射能にさらされることになった。これを二次被曝と呼んでいる。

なお、島に戻った「非被曝者」グループ、比較対象者(コントロール)として、直接被曝した人たちと共に継続的な健康調査がおこなわれている。

大石又七さんからのメッセージ

元第五福竜丸乗組員で被ばく体験の証言活動に精力的に取り組んで来られた大石又七さんは、去る四月二十六日に脳出血で倒れました。幸い発見が早く、いまは大分お元氣になり、加療・リハビリに専念しておられます。大石さんから「福竜丸だより」読者へのメッセージが届きましたので紹介します。

私は脳出血を起こして倒れ入院というはめになり、皆さんには大変ご心配をおかけいたしました。救急車で大森の東邦大学附属病院に運ばれ一カ月の入院の後、山梨のリハビリ温泉病院に転院治療のあいあつて、ようやく字も書けるようになりました。

一時は歩けず話すことも書くこともできず、人生終わるかと思いましたが、ここにも助ける神がいたようです。

ベッドの上で政府や科学者の発言を聞いてみると半世紀前のビキニ事件と同じで少しも進歩していないことにじつとしてはおれず書きました。読んでください。

ビキニ事件と福島原発のつながりやを想う

隠したはずのビキニ事件が

福島第一原発事故で表面化し始めています。私たちが半世紀以上も前に、目に見えない放射能・内部被曝の恐ろしさを味わわれ、世に訴えました。そして大量にまきちらされた放射能で大気圏や太平洋が汚染されました。その重大な出来事を隠したのは誰か、はっきり言ってアメリカべつたりの当時の政府(後の自民党)だった。

あの頃は国民大多数が放射能の知識はほとんどありません。被ばくの当事者を差別と偏見、アカと言われることを恐れて自ら身を隠しました。しかし放射能は過去のものとして消し去ることのできないものでした。

半世紀の間に被ばくした私たちや医学の進歩で内部被曝などのその内情が明らかになってきたのです。残念に思う

のは五八年と言う長い年月にビキニ事件はアメリカの水爆開発と日本政府の思惑通りに隠されたまま忘れ去られ、核兵器、放射能、被ばくは広島・長崎・チェルノブイリ・福島原発で語られビキニの被ばくが抜け落ち、口にする人がほとんどいないのが残念です。隠されているビキニ事件は忘れてはならない世界の大事な歴史の一コマです。今回も政府は原発被ばくや

放射能を詳しく調べることなく過小評価して国民には事実を隠しています。海や山に流れ出た何種類もの大量の放射能は自然放射能と共に加算され蓄積されて消えることはありません。放射能は同情も妥協もしてくれないのです。原発の放射性廃棄物とかゴミという言い方をしているのが、近づけば死に至る毒なのだ(無害化にするのに数万年から数十万年かかる)。無

想いをつなぐ

映像記録から

そこに林光さんが...

安田和也

(展示館学芸員)

手元に三枚のDVDディスクがある。一つは五月一日、第五福竜丸展示館でおこなわれた「明日へ希望をたもちつづけるために」との表題のコンサートだ。広島で被爆したピアノ二台が彼の地から運ばれ、大震災、フクシマ、ヒロシマ・ナガサキから第五福竜丸へと想いをひ

ろげ、未来への希いを込めたものだ。林光さんを想いながら組み立て、二部はその作品が演奏された。とくにピアノ連弾曲「ブランキ」、2台ピアノのためのラヴェル「ボレロ」林編曲、アンコールの「酩酊するアルレッキーノ」いずれも圧巻だった。

二枚目は、林さんをお願いして書いていただいた第五福竜丸のための「ラッキードラゴン・クインテット」の完結編ライブだ。二〇〇九年五月、展示館でのコンサートの記録。リハの映像や林さんへのインタビューも収録されてうれしい。

知な政治家が処方が見つかっていないものを、「そのうち技術が進歩すればなんとかなるだろう」と無責任な考えでたくさんの原発を作り、半世紀以上も経っているのにまだ解決策もなく廃棄物だけがたまっていくのです(日本には一万六千本もの使用済み核燃料がたまっているという)。

八月二日記

三枚目は二〇一一年四月三〇日、三軒茶屋のアートスペースSKENでの林さんのコンサートライブ。「死の灰」をテーマにおこなわれた連続企画のなかで、「原爆小景の作り方」という林さんと私の対談をはさみ、すごい演奏が即興的に展開され、思わず鳥肌が立つ。

この三枚のディスクを会員の皆様にごセットで特別頒布いたします。

【3枚組5500円を会員特価4500円にてお頒けします。お申し込みは、FAX 03(3521)2900。HPからメールで】



夏休みの初日、おばあちゃんやママたちと一緒にやってきた四歳児からの小学生の子どもたち。
パネルを使って第五福竜丸についての説明を、目を真ん丸にして聞いていました。

あつ！ 第五福竜丸が動いた！ ～千葉県佐倉市「平和を次の世代に」市民のつどい～

松本アイ子

きつとすべての子どもたちが初めて聞く「放射能の死の灰を浴びた船」だったのでしょう。うなずいて聞いているおとなを不思議そうに見上げながら、「船を作るって何？」「たいへんかな？」と少し不安そうに牛乳パックのパーツを見たり、パネルを見たり…。

さあ！つくろう

「マグロをとりにいっただけなのに大変なことになってしまった第五福竜丸の船を作ってみよう！」と呼びかけると、いつせいに黙々と作業開始。

「つどい」の実行委員の皆さんが、あれこれ工夫し、牛乳パックのパーツを準備してくださいました。《両面テープを上手に活用して接着剤は極力使わない！》という作戦がみごとに生かされ、幼い子もけっこう上手に仕上げていました。展示館ボランティアの豊さんや町井さんも活躍してくださいました。

四歳の男の子は、おばあちゃんが手伝おうとすると、「いい！自分でやる！」と設計図を見ながら（読めないのので）

頑張りました。「手伝おうとすると怒るんですよ」とおばあちゃんも少々寂しそうです。見たのは初めてとお話されて見ました。この子は、できあ

がった船のスクリーンのゴムを「91、92、・・・100回！」と巻きながら、会場エントランスに置いたビニールプールに急ぎました。そして、水に浮かべると、船は勢いよく水に浮かんで進みました。「進んだよ！第五福竜丸が、第五ふくまるが泳いでいるよ！」と大喜び。よく回らない舌でフルネームで船の名前を叫んでくれるなんて、とてもうれしいことでした。

子どもたちは自分の第五福竜丸を何回も走らせてから展示パネルで「ビキニ事件」と「ヒロシマ・ナガサキの原爆」について勉強してくれました。この船作りの取り組みはとも評判をよび、次の日も急遽開催、そして「来年も是非やってほしい」との要望もよせられています。

平和を次の世代へ

佐倉市に「平和条例」が制

定されて今年は一七周年にあたります。毎年、市内の中学校から一人ずつ一二人の生徒を使節団として長崎に派遣したり、八月一五日には、中学生の司会で平和の誓いを新たにする「佐倉市平和式典」が開かれるなどしています。その一つとして「平和を次の世代へ」の取り組みが行われてわけですが、（船作り）を足がかりにして、子どもたちが第五福竜丸事件や平和を考えるのは、すごくいいことだと実感しました。（まつもと あいこ／展示館ボランティア）

展示館で親子参加の教室

夏休み最初の週末、バルシテム東京の組合員さんが親子で、夏休み教室に参加しました。簡易放射線測定器「はかるくん」を使っての放射線教室と「牛乳パックで作る福竜丸」工作教室は、ボランティアの会との協働で、今年で一〇年目の取り組みです。

まずは、展示館からのお話をきいて館内の見学。その後



おとなは放射線教室です。昨年の福島第一原発事故以来、放射線・放射能に関する情報があふれています。キットを使っての実験につづき、いろいろな場所を測定するフリータイムでは、真剣な面持ちで測る姿が印象的でした。

工作教室は、今年も事前にボランティアスタッフがパーツや道具を準備してそなえました。思いおもしろいカラーテープで装飾して、大漁旗をつければ、自分だけの第五福竜丸の完成です。プールでの進水式では、おとなたちからも歓声があがりました。

連載⑬

晴れた日に 雨の日に

—第五福竜丸とともに—

山村茂雄

原爆をつくるな

つくるなら
花をつくれ
つくるなら
家をつくれ
つくるなら
未来をつくれ

戦争にちからはかせない
だが
平和のためになら!

この詩文は、第六回原水爆禁止世界大会「国民募金帳」に使われたものです。作者は前号で紹介した「原水協情宣技術グループ」に参加していた谷川俊太郎さんですが、谷

川さんの名は記載されていませんでした。情宣技術グループが制作したポスター、ステッカー、プラカードなどの宣伝物には、コピーを含め作者名は明記しませんでした。共同討議による制作ということはありませんが、それぞれが運動「参加者」という位置を当然としていたのです。

*

世界大会経費は、参加団体の応分の負担はありましたが主体は募金によるものでした。大会実行委員会など主催者が作る募金帳にはナンバーが付され取扱者に渡されました。大会参加者の多くは、この募金帳の寄金によって大会に参加したのです。ちなみに、募金帳は署名とは区別して取り扱われました。

今年も8・6が来る——駅頭や街角に割烹着すがたの女性を含めて募金がよびかけられました。農村でも漁村でも国民募金帳が各戸の軒を回りました。毎年の夏の行事、大会募金運動は、ヒロシマ・ナガサキの思いを個々の募金者に結ぶ原水爆禁止運動の要ともいうものでした。それはビキ



60年制作のステッカー。使われているシンボル・マークもこの年に作られました。キャッチフレーズの「いま平和をにがすな」「ムダな核武装はやめよう」は漢字の言葉が対になっています。——近頃の事態にもすぐに活かせるようなデザインとスローガンです。

ニ被災事件以後の澎湃と取り組まれ経験した原水爆禁止署名運動の継続でもありました。募金に応ずることで運動に参加し、大会を支えたのでした。

*

その後、代表の選出が組織代表の色合いを強めるにつれこの性格が薄れていくようになりませんが、第五回、第六回大会のころはまだ「国民募金帳」が大会寄金の中心に位置していたのでした。

谷川さんの詩文が載る募金帳は一枚に一〇名の記入欄を持つものでした。この募金帳が何枚全国に配布されたかは調べれば分かることですが、いずれにしろ十万余枚余の募金帳が使われました。

「原爆をつくるな つくるなら 花をつくれ」は、合言葉になりました。ことに地域で草の根で活動する人たちのつよい共感を得るものとなりました。この言葉は運動をも育てました。その一つを紹介しておきましょう。

六五年五月、被爆二〇周年を記念して青森市柳町通りの

グリーンベルトに二〇本の八重桜の苗木が植樹され「原爆をつくるより花をつくれ」の立看板が掲げられました。その後、植樹が増やされ、やがて桜並木に成長した花のもとで平和の集いなどが開かれていくのです。

*

「いっぺん実体というものを出来るだけ効果的にというやり方は、詩のかき方とはぜんぜん別のもではないという気がしたのですね。僕なんか考える「原水爆をつくるな」にも金がある、なくすにも金がある」というのも僕にとつては詩的な発想です。一見、詩じゃないのですが、きりはないという気がする。だから僕は名前を出しても恥しくないし、誇らしい気がするのです。」

一九六〇年七月号の「新日本文学」に掲載された座談会「大衆運動における宣伝と芸術——原水協情宣技術グループの活動をめぐって」に出席した谷川俊太郎さんの発言です。谷川さんは別の個所でも話されています。

(7めん下につづく)

若島幸作さんと

一枚のカードのこと

石川敏明

第五福竜丸保存運動に最初から中心的役割を果たされ、六月二日亡くなられた若島幸作さんについて、江東区職員労働組合の石川敏明さんにご寄稿いただきました。

私は、一枚のカードを大切に持っています。それは、今では見ることも使うことも無くなったJR東日本のイオカード。今から一四年前の一九九八年三月、若島幸作さんが江東区役所を定年退職する記念としてお作りになったもので、若島さんを励ます会の席で、若島さ



んから会の参加者全員に配られたものです。カードの図柄は建設中の第五福竜丸展示館の写真で、展示館の三角形の骨組が第五福竜丸を取り囲んでいます。カードの上に「長い間のご支援ありがとうございました。一九九八年三月一九日若島幸作」と書かれています。

カードについている小さな手紙の全文をご紹介します。

「このイオカードの写真は、一九五四年（昭和二九年）三月一日、ビキニ環礁でのアメリカの世界最初の水爆実験によって死の灰を浴びた『第五福竜丸』が、その後、数奇の歴史を経て、一九六七年に江東区夢の島に廃棄されました。水爆被害の生きた証人である第五福竜丸の発見以来、組合運動の傍らその保

存運動に取り組み、革新都政下で『展示館の完成』（一九七六年）に至る前年の九月に撮影したものです。第五福竜丸は、原爆ドームに並ぶ原水爆禁止運動のシンボルとして今でも活躍しており、また、今年三月一日、奇しくも二九年ぶりにエンジンと船の合体が夢の島『展示館』で行われました。一九九八年四月 若島幸作」

第五福竜丸の保存運動は、若島さんのライフワークそのものだったという事が、このカードでよくわかります。その若島さんが区役所を去る年に、まるで間に合わせるかのようにエンジンが戻ってきたというのも、運命的な何かを感じます。

若島幸作さんの最初の印象は、「いつもダブルのスーツを着こなしているダンディな人」というものでした。私が江東区職員労働組合の活動に関わりだした頃、若島さんは当時の上部団体である「自治労働本部」の役員をされていました。たまにお見かけする若島さんは、若かった私には、なんだかとても偉い人に見えたものです。普段の若島さんはユーモアのある方で、いつも冗談を言って周囲

の人を笑わせていました。

その若島さんが第五福竜丸の保存運動に大きな貢献をした人だという事は、若島さんが江東区職労の執行委員長に就任し、私が平和運動を担当するようになってから知りました。「どうして、第五福竜丸を残そうと思ったんですか」と、若島さんに聞いた事があります。その返事は「いやあ、どうしても何も、最初にこの目であれ（福竜丸）を見た時にこれは何として残さなきゃいかん、と思ったんだよ。もうそれだけだよ」この、若島さんの一途な思いがあったからこそ、私たちは今日も第五福竜丸の姿をこの目で見る事ができるのだと思います。私など若島さんの足元にも及びませんが、少しでもその「思い」を受け継いでいけたら、と思っています。若島さん、本当にありがとうございます。（いしかわ としあき／江東区職員労働組合書記長）

編注Ⅱフランスの核実験に抗議して、第五福竜丸船体前での72時間座り込み。一九七三年七月二三日、撮影若島幸作さん。若島さんの保存運動の記録は新聞切り抜き・写真等多岐にわたる。

「運動自体を宣伝という一種の技術的なものだけで考えていいのかしら。原水爆反対運動にしても祭りという意味でも考えるべきじゃないかという気がするのです。俺たちは死にたくない、命はよみがえっていくべきだという祭りのもつ根源的な生命力が欲しい」座談会の出席者は、谷川さんのほか、瀬木慎一／美術評論家、関根弘／詩人、栗津潔／グラフィックデザイナー、吉田嘉清／原水協事務局次長、山村茂雄／原水協情報部員、司会／武井昭夫。なお、同誌は座談会に合わせ前号で紹介した「漫画パンフ」を巻頭に抜粋して掲載しています。

*

この募金帳が使われた一九六〇年は、日米軍事同盟強化の道をどう阻むか、たまたかいの日々でもありました。その状況のなかで「原爆をつくるな つくるなら 花をつくれ」の十万枚余の募金帳が個々の人の手によって全国の町や村で原水爆禁止の声を結んでいたのです。（やまむら しげお／第五福竜丸平和協会顧問）

ブラジルから 高校生平和大使来館

8月15日、ブラジル被爆者平和協会の渡辺淳子さんと、高校生平和大使2人が展示館を訪れ、ボランティアガイドの説明を受けました。一行は、核兵器廃絶を求める署名を国連欧州本部に届ける高校生平和大使で、9日には長崎の平和祈念式典に参加、日本全国から選ばれた高校生大使と共に、スイス・ジュネーブの国連欧州本部に向かう前に、展示館に立ち寄りました。



◇素晴らしい展示でした。ブラジルの平和大使として、たくさんのことを学ばせてもらいました。福竜丸事件を私の平和への思いとして、他の日本の戦争体験と一緒に持ち帰り、世界に伝えたいと思います。ありがとうございます。(ビニシウス 17歳)

◇驚きました。私は今までこの出来事を知りませんでした。人類が共に力を合わせれば達成できるということが判りました。素晴らしいことだと思います。この展示で、私たちが互いにやってはいけないということを知ることができました。核兵器のない平和な世界の為に。世界へ、愛をこめて。(ダニエラ 17歳)

ヒマワリ咲いた！

ヤノベケンジさんのアート作品「サン・チャイルド」が立っていた<足跡>



に植えられたサンフラワー（ヒマワリ）が、晩夏の太陽に向かって咲きそろいました。つくるなら 花をつくれ！

サン・チャイルドは9月23日まで福島現代美術ビエンナーレに出品され、福島空港に展示されています。

8月・来館者の感想より

◇沈黙して存在している第五福竜丸からとても重苦しいメッセージを感じ、あらためて強い憤りを感じました。(神奈川 52歳 男)

◇胸がいっぱいになり苦しいほどでした。起きたことをけしって忘れないこと、ずっとずっと覚えていることで、誰もが何かできるのではないかと思います。

◇とても勉強になりました。この船を見てあらためて水爆や核がもたらす悲劇と命の重さ、この悲劇を繰り返さないために私たちに何ができるのかを考える時間を与えてくれたから。(東京 中3 15歳 男)

◇言葉につまりました。絶対に忘れてはいけません。私は忘れません。(埼玉 37歳 女)

◇今まで逃げていた現実を見た気がする。このことは忘れてはいけない。これからの平和のために(埼玉 16歳 男)

◇人間は自分の住居を壊しておいて、このままでいいはずがないと感じた。(埼玉 16歳 女)

◇平和への道程としてこれからも啓発をお願いします。久しぶりに訪れて非核の原点を思い出しました。(東京 60歳 女)

◇人はずっと過ちを繰り返し、また繰り返し…人の日常とは何なのだろうと思いました。(福岡 51歳 女)

◇原子力や技術や機械に問題があるわけではない。使う人間に問題がある。(埼玉 44歳 男)

◇今年吹奏楽コンクールで「ラッキードラゴン～第五福竜丸の記憶」を演奏します。今の私にできることは、この曲を心をこめて演奏することです。精一杯がんばります。(千葉 15歳 女)

*事務局嘱託・大友里恵さんが8月末で退職しました。お疲れさまでした。

9月23日久保山忌に多彩な催し

9月23日は、第五福竜丸無線長・久保山愛吉さんのご命日です。秋のお彼岸でもあり、毎年多くの方がたが展示館を訪れます。恒例となった市民有志によるとりくみを紹介します。

◆32回久保山忌句会

同実行委員会主催（新俳句人連盟など協賛）の句会には、第五福竜丸平和協会から優秀作品に「船員証」が贈られます。

◆第20回平和を語る第五福竜丸のつどい

朗読、紙芝居、語り、合唱、演奏などが市民有志の出演で行われる催し。左舷船首下で、平和への願いと希望をつむぎ演じられます。展示館ボランティアの会も毎年出演。今年はマーシャルの人々の声を届けます。

◆第26回第五福竜丸のつどい

東京原水協など主催の学習企画です。久保山碑に献花後、夢の島マリナー会議室で「原水爆禁止運動の歴史を学ぶ」をテーマに学習会を開きます。

◆マグロ塚の会9・23平和の集い

元乗組員・大石又七さんを囲んで懇談する「マグロ塚の会」の集まりは、本人の出席はかないませんが、大石さんがビキニ被ばく者として心を痛め、訴えてきた原発の問題とビキニ事件の関わりを考えあう企画です。NHKドキュメンタリー「原発導入のシナリオ」のプロデューサー東野真さんがゲスト参加します。